大松博文に見られるスポーツの指導をめぐる考え方の再検討： 「戦争体験」に着目して

鈴木 秀人

SUZUKI Hideto: A reexamination of the sports coaching methodology of Hirobumi Daimatsu, focusing on his war experiences. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.

Abstract: Hirobumi Daimatsu was a legendary sports coach in Japan, especially after coaching the Japanese women's national volleyball team ("the Oriental Witches") that won the World Championship in 1962 and the gold medal in the 1964 Tokyo Olympic Games.

He was famous for his extreme training methods and had a great influence on coaching methodologies for Japanese sports as a whole. Although many studies have examined his way of thinking from various perspectives, the relationship between his war experiences and his approach to coaching has not been analyzed sufficiently. The present study aimed to examine how Daimatsu's first-hand war experiences ("keiken") developed into his coaching beliefs ("taiken"), focusing specifically on a theory created by Yoshida that war veterans' understanding of their experiences had been changing over time from when they re-entered society and grew older. Yoshida made this transformation clear by referring to 5 periods since the end of the Second World War in 1945.

Firstly, many demobilized soldiers including Daimatsu had to face civilians who hated the Japanese military just after defeat. They lost their morale, from 1945 to around 1950 could not talk about the military or the War. Secondly, even after former professional officers and wartime politicians had been rehabilitated, the veterans themselves still found it difficult to positively address some topics related to the War in the 1950s.

Thirdly, the generation that had experienced the War who shouldered the responsibility of reconstruction from the destruction and devastation gradually gained confidence and became able to talk about their wartime experiences. Some of them discovered a positive meaning in their own experiences on the battlefield from the late 1950s to the late 1960s. Daimatsu was a typical example of the third period because he spoke clearly about the positive meaning of his war experiences.

Penultimately, in the 1970s and 1980s, that generation of Japanese became able to accept the responsibility for the War, especially in Asia, and to gradually acknowledge the negative aspects of their experiences. Finally, in the 1990s, a small number of survivors chose to disclose tragic stories that had not come to light previously.

Thus, Daimatsu was only one of a generation that had experienced the War and who became recognized as a spokesman for many of that generation who held common feelings.

Key words : military experience, ideologize experience, the war generation, the Oriental Witch

キーワード : 軍隊経験, 経験の思想化, 戦中派, 東洋の魔女

I 緒 言

新型コロナウイルス感染症の世界的広がりにより、はからずも延期となった2020年オリンピック

ク・パラリンピック東京大会であるが、この数年来、同じ東京で1964年に開かれたオリンピックをめぐる様々な振り返りが行われている。そういった近年に書かれた論考を見ていくと、そこで再三取り上げられる1964年東京オリンピックの記

憶に突き当たる。それは、女子バレーボールの日本代表チームいわゆる「東洋の魔女」を率い、「鬼」と呼ばれた厳しい指導によって金メダルを獲得した大松博文監督をめぐるものである。

例えば小笠原・山本は、「暴力」というスポーツ界の「膿の根源が生み出された時期は、一九六四年の東京オリンピック開催に遡ることができる」とし、それは「六四年を契機に、金メダル獲得と国家の威信を賭けて、戦前の軍国主義から戦後へと召喚されたもの」で、中でも『『東洋の魔女』を鍛え上げた『鬼の大松』こと大松博文バレーボール全日本女子チーム監督が、その後、昭和の憧憬として語り継がれ、神話化されてきたことがその代表例』であり、『『東洋の魔女』は、戦前と六四年以後をつなぐ役割を果たしたと考えるべきだ』（小笠原・山本、2019）と主張している。そして、そのように歴史的に位置づけた大松の指導を、「選手の主体性や声を無視した『しごき』や非人道的な特訓が、『金メダルのため』にいつてまかり通るばかりか、成功の事例として美化されてきた」ものと理解するのである。このように大松の指導を「非人道的な特訓」と見なす見方は、小笠原・山本が参考文献に上げた牧野（1986）の見解をはじめ、以前から目にするものであった。

しかしその一方で、最近の論考の中には、こういったものとは一線を画す大松の見方も見出すことができる。例えば下竹（2018）は、大松の指導を「個人の抑圧、従順の強制、不合理性、非科学性」といった現在批判的に語られる「スポーツ根性論」の端緒とするような見方に疑問を呈し、この形成にはスポーツ界以外の「根性論」が関わっていたと分析し、従来の見方は大松の指導の内実を必ずしも適切に捉えていないと指摘している。また、新聞記者の杉山（2019）も、「絶対的な主従関係のもと、過酷な練習を強いた大松の成功体験こそが、あしき根性論を日本に根づかせ、今に至っている」といった見方は、関係者への取材を通して正しくはないことに気づかされ、「回転レシーブを編み出した発想力や練習での創意工夫、相手をとことん研究し尽くす姿勢」など、「根性論からくるただのスパルタではない部分にこそ、

『大松イズム』の遺産はある」と結論している。

何れにせよ、オリンピックで成功を収めた指導者は数多い中、特に大松が関心を集めるのは、彼の行った指導が現在においても影響力があると考えられているからだろう。石坂・松林は、1998年に開催された長野オリンピックのレガシーを分析していく内に、「同じ東京で開催された六四年大会が強烈なまでの成功神話を伴って、二〇年大会に影響力を及ぼし続けていること」を「意識せざるをえなくなった」と述べている（石坂・松林、2018）が、まさに大松は、その「強烈なまでの成功神話」の象徴的存在であることは間違いない。本論文は、そのような大松のスポーツの指導をめぐる考え方について、改めて検討を試みるものである。

II 先行研究の検討と本論文の目的

1. 大松に関する先行研究

冒頭で大松に関する近年の見解の一部を紹介したが、大松と「東洋の魔女」について取り上げた論考は、1964年大会の直後から既に種々書かれていることを確認できる。

例えば作田（1967）は、大松が言う『『根性』とそれをつくる『ハード・トレーニング』』が多く日本人に支持された理由は強敵を破る目標を達成したからで、そこから出てくるスポーツと実生活を結ぶ「推論」の「スポーツの強い国家は実力の世界でも強い」、延いては強いチームを持つ企業の社運は隆盛と考える「実証的な反映論」が、「チームが強くなれば、社運も隆盛になるだろう」という「呪術的な前兆論に転化する」ことで、その「圧倒的な強さ」は「日本の国家の明るい未来を感じ」させ、「日本のナショナリズムを刺激した」と分析する。加えてその強さの根源を、大松の技術的指導の「すぐれた能力」と「チームの集団の和をつくり出した人格的な統率力」、言わば「魔女たちにとって父親の役割を演じた」大松と選手の間築かれた「家父長制構造」に見出し、「これは大松氏のパーソナリティと特定の選手との結合によってのみ成功した一回限りのパターンであ

った」とも指摘した。

ここで作田が提示した視点はその後の論考にも継承される。海老原（2000）は、「呪術的な前兆論へ」の転化や「家父長制」を視点にした作田のロジックをほぼそのまま踏襲した上で、大松の指導を高度経済成長という時代背景と結びつけ、彼の「根性論」は、それ以前の社会に吹聴されていた『『無責任』の思想を封殺』し、「父が存在していながら父性が欠如するという奇妙な事態を迎え」た社会、そして高度経済成長を「成し遂げるのだという」「一種の連帯感」を共有した時代であったからこそ、機能しえた思想だったと読み解いている。

この2人が注目した大松と選手との関係については、その後ジェンダーの視点からの考察も行われている。谷口（2007）は、「監督は選手を家族のように思い、選手は監督を父とも兄とも慕っているという心情が醸成されている」中で、「指導的な役割を担う監督あるいは夫の指示に、選手あるいは妻は従順に従う（従わなければならない）という意識の共有」が行われたとし、「東洋の魔女」はこの「能動－受動の性別による役割分担を体現する」存在であったが、他方スパルタ指導に耐えたことにより、「男女の身体にまつわる言説化された枠づけ」を「越える身体の強靱さと可能性を見つけた」存在としても捉えられようとした。

かかる視点からの検討はその後さらに深められている。新（2013）は、元々は「病理に侵されやすい」女性の身体を「保護するため」に繊維工場へ導入されたバレーボールは、大松のハード・トレーニングによってそういった「女性的身体の克服」、即ち「女性性を否定する」ものとなるが、その結果手にした「金メダルを胸に主婦へと旅立つ」ことを望んだ魔女たちは、反転して「女性性を取り戻すこと」へ帰着したと解釈する。

この他にも、リーダーシップ論を用いて大松の指導を分析した三隅（1966）や、数量的手法を用いて大松の著作の内容を分析した山岸（1979）の研究等々もあり、大松と「東洋の魔女」を対象にした考察は多様な視点から行われてきたのであった。

2. 考察が深められてこなかった問題

しかしながら、これまでの論考の中で度々言及されているものの、考察が深められてこなかった問題がある。それは、大松のスポーツの指導をめぐる考え方と彼の戦争体験との関係についての考察である。大松は著作や講演等において、戦場における経験が自身に大きな影響を与えたことを繰り返し語っている。従ってそれに触れている論者はいなくはないが、その多くは、大松の考えの背景には戦争体験があることを指摘するだけで終わっている。

この点について掘り下げた論考は殆どないが、「日本におけるスポーツ理念の代表的存在として、今もってスポーツ界に大きな影響を与えている」と思われる「根性論」について考察した森川（1980）は、その歴史的起源を探る過程で大松を取り上げている。森川は、「スポーツにおける身体と精神の関係を社会科学的視点でとらえなおすことが『根性』論をときほぐすカギ」とした上で、ベストセラーとなった大松の著書「おれについてこい！」（大松、1963）から「わたしは、やればできるのだ、という信念、大阪ことばでいう土性骨を、ビルマ戦線の死の彷徨の中で見いだしたように思います」というくだりと、「わたしがもつ、信じたことに邁進して動じない図太さ、いかなる肉体的困難も精神力によって克服できるという信念、それはこの戦争体験なくしては考えられません」と述べられた箇所をつなげて引用し、「根性論ブームをつくりだし」た大松には戦争体験があることを先ず指摘する。

その上で、『『根性論』成立のメカニズムは、軍国日本のイデオロギー形成に貢献した『国民教育』の成立過程をみることによって理解できる』と言う森川は、当時の教育体制の中で重視された「体操」「教練」に見られる「身体と精神にたいする奇妙なとらえ方」の存在を指摘し、そのとらえ方の下で行われた教育は、「あたえられた命令にたいしての絶対的服従」という「人間性を無視し、生命をも辞さない日本精神主義を『身体』と『精神』の関係」へ適用することで、『『神国日本』の

勝利を盲信させた」と説明している。

そして森川は、かかる精神主義は敗戦によりいったん否定されながら、戦後20年の間に「ふたたび『逆コース』の道をたどった」東京オリンピック開催当時の社会において、「試合は真剣勝負であり、戦争と同じ」と考える大松の「徹底した『勝利至上主義』」に受け継がれたと見る。そこで大松が行った「世間の常識をはるかに越える猛練習」と「それを可能にした人間関係」を、「旧日本軍の秩序を維持したあの『軍隊家族主義』につうずる」と捉えた森川は、「ここでもかれの戦争体験はいかなく発揮されている」としたのであった。

だが、作田が「魔女たちにとって父親の役割を演じた」大松と選手の間に築かれた「家父長制構造」と表現し、谷口も「監督は選手を家族のように思い、選手は監督を父とも兄とも慕っているという心情が醸成されている」と見た人間関係を、「『軍隊家族主義』につうずる」とする解釈には、当の「軍隊家族主義」が「家族主義の一面である相互扶助や、肉親の愛情におきかえられるような観念をまったく欠いたもの」と指摘されている(藤原, 1978)ことから疑問を抱かざるをえない。そもそも、「いかなく発揮されている」と言うためには、大松のどのような戦争体験がどのようにそこに発揮されているのかを具体的に検討しなくてよいのだろうか。これは大松について語る他の論者にも共通する問題と言えそうである。

3. 本論文の目的

このように、大松と「東洋の魔女」に関する研究は様々な視点から行われてきているが、大松の戦争体験とスポーツの指導をめぐる考え方との関係については、実質的に殆ど検討されていないに等しい。大松の戦争体験は考察の対象になっていないか、言及されてもその個性や具体性が詳しく分析されることはなく、理不尽な命令に対する絶対服従といった軍隊の一般的な印象を大松の姿に重ね、それが彼の厳しい指導の原点であるかのように捉える表面的把握に止まっているからである。大松が戦争体験の影響を明言したことが、か

えってこの点についてそれ以上の考察を行う必要性の認識を鈍らせた面もあるかもしれない。

大松のスポーツの指導をめぐる考え方について再検討を試みる本論文は、先行研究に見出されたかかる考察の欠落ないし不備を補おうとするものとして構想された。よってその目的は、大松の戦争体験と「東洋の魔女」の指導に具現化された考え方との関係を、これまでのような戦争体験の表面的把握を越えて明らかにすることに措かれる。

この目的を達成するために本論文では、戦争に関する近年の歴史研究において提起されている、戦争体験は体験者のその後の人生の中で変容していくという視点(成田, 2010, 2020; 吉田, 2011, 2020; ほか)を以て、大松の戦争体験の考察を行うことにする。この視点については次章で詳述するが、大松の戦争体験を固定的で不変的な過去の出来事と見るのではなく、戦後の社会を生きた大松が「東洋の魔女」を指導したまさにその時期における「戦争体験」としての意味を把握し、その戦争体験は彼のスポーツの指導をめぐる考え方とどのようにつながっていたのか、そして実際の指導においてどのような姿として具現化されたのかを明らかにしようとするのである。

既に見た海老原の見解をはじめ、高度経済成長や戦後の復興としての東京オリンピックなど当時の社会状況と大松の指導を結びつけ、その意味を論じた研究はこれまでも行われている。だが、大松の戦争体験を考察の中心に据えて、しかもその意味を彼が「東洋の魔女」を指導した時代の中で考えようとする研究は殆ど見当たらないのである。

III 戦争に関する研究からの示唆

1. 「経験」と「体験」の区別

アジア・太平洋戦争について多くの著作がある吉田は、一人一人の戦争体験の問題は「その人の戦後の歩みとの関係が重要な意味を持つ」(吉田, 2011)と指摘した上で、満蒙開拓の語りに関する研究で蘭が述べた次のような見解を引用している。「体験者はその出来事のみを生きたのではな

く、その体験を秘めながらもその後の人生を生き抜いている。筆舌に尽くしがたい体験を秘めながら、その後の人生をどのように生き抜いてきたのか、その体験をどのように思想化してきたのかは、非常に大切なことがらである」(蘭, 2009)。同様に、こういった視点を持つことの重要性を成田は以下のように説明している。「戦争の経験は、あらゆる意味においてその人の人生を規定するがゆえに、戦争を語ることは自らのアイデンティティを確認する作業となり、戦争とどう向きあい、戦争をいかに受け止めるかによる『主体』が形づくられる」(成田, 2010)。

このような、戦争を経験した人々が「戦時中にどのような体験をしたかということだけではなく」、「自分自身の体験に戦後どのように向き合ってきたのか」(吉田, 2020)に関心を寄せる吉田は、海軍の軍医であった佐藤が述べた「経験とは、『実際に見たり聞いたり行ったりすること、それによって得た知識技能』のことであり、体験とは『経験したあらゆる真実と、それに対して生じたところの、我々の全精神の反応』を意味する」もので、ゆえに「経験は自己成長しないが、体験は経験より出発し帰結を求めて思索しつづけ変容する」ものとした定義(佐藤, 1990)を採用し、当初は厳密に分けて考えていなかった「経験」と「体験」を区別するという作業を加えて、さらに考察を深めている(吉田, 2020)^{注1)}。

本論文ではこれ以降、この定義に従って「戦争経験」と「戦争体験」を区別して論を進めていく^{注2)}が、かかる視点を持つと、従来の論考に見られる戦争体験の表面的な把握の問題がより明確になる。そこには、「体験は経験より出発し帰結を求めて思索しつづけ変容する」という視点が欠けている。厳しい指導を行う大松に、戦争の「経験」があった過去を述べるだけでは、彼が戦争と「どう向きあい」、それを「いかに受け止め」、その経験を「どのように思想化してきたのか」という意味での「戦争体験」は問われないままなのである。

そしてその戦争体験は、戦時中は元より「戦後の生き方・思索・成長により、各人各様であると同時に、各人の中でも変容しつづける」という理

解(佐藤, 1990)も加えると、戦後をスポーツの指導者として生きた大松が、日々の指導の中に自らの戦争経験を「どのように思想化」したのかを明らかにすることこそが、彼の戦争体験とスポーツの指導をめぐる考え方との関係を、従来の表面的把握を越えて明らかにするものと思われるのである。

2. 「戦争体験」の変容を追うための時期区分

ところで、戦争体験を変容するものとして見ることの必要性は福間も提起している。戦後の我が国において「戦争体験の位置づけや意味は一定だったわけではない。むしろ、時代とともに、それは変容してきた」と言う福間は、その変容を世代による教養の持ち方に着目して追いかけて、3つの時期に分けて論じている(福間, 2009)。また、先にその見解を引いた成田も、「体験／証言／記憶は三位一体をなすとともに、時系列的であり、時期によって三者の関係が変化し統御する主たるものが交代する」という理解に立ち、やはり3つの時期に分けて戦争体験を論じているのである(成田, 2010)。

これらの見解から、戦争体験を「変容していく」ものとして把握するということは、我が国の人々がアジア・太平洋戦争の後に生きてきた時間を、ある特徴を持った戦争体験が作られ共有されたいくつかの期間に切り分ける作業になることが分かる。本論文ではその時期区分を、日本の社会全体の変化と関連させつつ戦争や軍隊に対する人々の意識を5つの時期に分けて捉えた吉田(2011)に倣うことにした。大松という1人の人物が自身の戦争経験をどのように「思想化」したのかを探ろうとする本論文の考察には、戦争を経験した個人の意識の持ち様に目を向けた吉田の捉え方が有効であると思われるからである。

吉田による戦後の時期区分は以下のようである。第1に、1945年の敗戦直後、軍紀が崩壊した軍隊の所業に対する反発やそれ以前からの軍人の独善や横暴に対する反発が敗戦で一気に噴出し、一般の国民は軍国主義の犠牲者であると喧伝した占領政策の影響もあって、復員してきた戦争

経験者たちが一般の人々からの冷たい視線に向き合うことになった時期があった。アジア・太平洋戦争の敗戦から1950年前後までの数年間である。

第2に、1951年のサンフランシスコ講和条約調印後、独立の回復と経済的にも50年代半ばにはほぼ戦前の水準に回復を遂げた社会で、公職追放者や旧軍人の社会的復権に見られる逆コースが始まるものの、なお軍隊に対する人々の強い反感が残る中、戦中派という世代として明確化されていく戦争経験者たちの多くは、その経験について積極的には語らなかった時期があった。1950年前後より1950年代後半である。

そして第3に、高度経済成長を担った戦中派が社会の中堅層としての自信と自負を持ち、戦友会をはじめとする旧軍人たちの集まりも組織化され、亡き戦友への追悼とともに戦争経験をめぐる発言も活発にはなっていくものの、依然そのある面は語ることができなかった時期があった。1950年代後半から1960年代後半である。

その後、戦友会が最盛期を迎えた1970年代から80年代にかけて、アジア諸国からの戦争責任の追求もあって戦争経験の否定的な面にも向き合うようになり、これまでは口を閉ざしてきた加害行為を含む戦争経験の真実を率直に語ることが始まった第4の時期と、戦争経験者が大きく減少し戦友会などの組織の多くが解散していく状況下において、自分が関わった戦争の加害性や侵略性も認めながら、最後まで語ることを避けてきた戦争経験も後生に残そうという動きがより顕在化した1990年代以降の第5の時期が想定されている。

この捉え方に依拠すると、5つの時期の中で本論文が主に目を向けるのは第2と第3の時期ということになる。大松が「東洋の魔女」の母体となる日紡貝塚女子バレーボール部の監督となったのは1953年11月で、その後の5年間に国内の全てのタイトルを制覇して日本代表となり、1960年の世界選手権では2位、1961年の三大陸選手権で初めて国際舞台での優勝を果たし、さらに1962年の世界選手権でも優勝した後、1964年の東京オリンピックで金メダルを獲得して引退するまでの期間がこの2つの時期に跨がるからであ

る。ただし考察の対象となった大松の発言の大半は、1962年の世界選手権に優勝した翌年に出版された「おれについてこい」（大松、1963）と「東洋の魔女の五年間」（大松ほか、1963）という2冊の著書の中で述べられたものなので、それらは基本的には吉田が言う第3の時期における大松の戦争体験として理解されるべきであるとともに、1964年の東京オリンピックにおける金メダルの獲得は、これらの著書出版の後であることには注意しておきたい^{注3)}。

次章では、この時期に大松が自らの「戦争経験」を「戦争体験」としてどのように「思想化」したのかを探るため、思想化の前提に在る大松の「戦争経験」の中味を明らかにする。

IV 大松の「戦争経験」

1. 軍隊生活が境

1962年の世界選手権で優勝した翌年の1963年に出版された「おれについてこい！」では、大松が自身について29頁を割いて語った最終章「わたしのこと・家庭のこと」の中に、「戦争体験」と題する一節が12頁にわたって設けられ、それ以外にも、自身の軍隊での経験や戦争への言及は9箇所に及び、他にも、戦争とは直接関わりがない内容の文中に、「兵法」や「死地」或いは「大東亜共栄圏」といった軍事や戦争と関連する表現も散見される。

大松にとって戦争をめぐり経験がいかに大きなものだったかは、彼の学生時代を知る人物によく言われたという以下のようなエピソードから理解できる。「おまえは学生時代、コーチに来ていたころには、人からなにをいわれても、ハイ、ハイで、ひとつとして自分というものをもたない男だった。…中略…その同じ男が、いまでは、いっさいを自分ひとりでやってのけ、老人のわしなど、なにをおまえにいうたって、決して自説を曲げないやつになってしまった。どうも軍隊生活が境だな」（大松、1963）。

このように、戦後になって大松が明らかに変貌していたことは他でも述べられている。1962年

の世界選手権の後、昔の友人から届いた手紙には、次のように書かれていたという。「大松君、きみは変わった…中略…あの気の弱い、やさしい性質ーバレー＝チームの中でもいちばん地味で、いつも縁の下の力もちだったきみが、よくもいまのようなきつい男になったものだ。われわれ当時のなかまは、きみがか弱い女性たちに行っている過酷な練習ぶりを知らされて、まったくびっくりしている」(大松, 1963)。

大松はこう述べている。「成熟期以前に、かつて所有したどのようなものも通用せず、自分の主張などいっさい許されない、いわゆる自由のいっさいを奪われた一時期、肉体の奴隷的酷使、ひとりになれるのは便所の中だけーそういう体験をさせた軍隊生活は、その後の人生にどんなに大きな意味をもつか、はかり知れないようにわたしは思います」(大松, 1963)。このように本人が言う「軍隊生活」は、具体的にどのようなものだったのかを見てみよう。

2. 軍隊における生活

まず、「おれについてこい！」に書かれている回想をもとに、大松の軍隊での来歴を確認する。大松は、1941年に関西学院高商を卒業して日紡に入社し、その年の12月、対米英戦争の開戦直後に召集され、広島で軍隊生活をスタートした。配属されたのは、弾薬や食料などの物資補給を担う輜重兵と呼ばれた兵站部隊である。すぐに中国大陸へ送られて半年余りの初年兵教育を受け、その後、中等教育以上の学歴がある者の特権とも言える幹部候補生試験を受験して合格した大松は、そのまま中国で6ヶ月間の予備士官学校生活を送った。

卒業して士官となった大松は、台湾、シンガポール、マニラ、パラオを経て南方の拠点ラバウルへ赴くが、その先の赴任地だったガダルカナル島から日本軍が撤退したことにより、再びパラオ、マニラ、サイゴンを経てシンガポールへ戻り、1944年3月にビルマ(現ミャンマー)のラングーンへ送られた。アジア・太平洋戦争の中で「最も無謀と言われたインパール作戦」(NHK BS,

2017)に参加するためである。英印軍の要衝であったインドのインパール攻略を目指したこの作戦では多くの日本軍将兵が命を落とすが、大松は九死に一生を得る。敗戦後、大松は捕虜収容所で2年近い抑留生活を送った後、日本へ帰還した。

南方戦線において大松は「マラリアにかか」ったり、乗っていた輸送船は「毎朝、毎夕、かならず青い海に白い尾をひいて、十二、三本の魚雷が襲って」きたものの「奇跡のように、その魚雷群から逃げきった」り、赤道直下を行く輸送船の船内は「生き地獄にのたうつものの姿」だった(大松, 1963)といった苦労はしているが、激しい戦闘などは経験していないと思われる。従って、昔の友人が「まったくびっくりしている」と言うほど変貌した契機は、その後のインパール作戦の従軍経験にあると思われるし、大松自身、次のように述べている。「わたしは、やればできるのだ、という信念、大阪ことばでいう土性骨を、ビルマ戦線の死の彷徨の中で見いだしたように思います。以来、それを腹の中にすえてしまったのです」(大松, 1963)。では、ビルマの戦場において大松は、一体何を体験したのだろうか。

3. インパール作戦における経験

3.1 作戦の前半期

ここでは、「おれについてこい！」に書かれている大松の回想と戦史に記録された作戦行動を突き合わせながら、大松が実際に経験したことを探ってみる^{注4)}。インパール作戦の目的は、日本軍が制圧していた「ビルマ奪回をねらう英印軍の軍事拠点であるインパールを攻略」し、さらには「インドの反英独立の気運を醸成し、英国の支配からインドを脱却させ」ることにあつたとされる(遠藤, 2015)。作戦計画では、3つの師団(第31, 15, 33)がそれぞれ北、中央、南の三方からビルマとインドの国境を越えて侵攻し、インパールを攻撃することになっていた(防衛庁防衛研修所戦史室, 1968, 以下「戦史室」と略す)。

大松がいた独立輜重兵第55中隊は、北からのルートを進んだ第31師団(通称「烈」兵团)の指揮下にあり、インパール北後方の交通の要衝で

あるコヒマを占領して敵増援兵力の進行を阻みつ、その一部がインパールへ進撃する予定であった（戦史室、1968）。何れのルートをとるにせよ、ビルマからインパールへ向かうには河床が1000メートルを超える大河のチンドウィン河を渡り、幅200から250キロ、標高2000から3000メートル級の山々が連なるアラカン山系を越えていく必要があった（戦史室、1968）。大松がいた烈兵団が進んだ道も、「切り立った崖の狭い道」で「師団長をして『実に想像を絶する天険』と言わしめるほど」（NHK スペシャル取材班、2018、以下「取材班」と略す）の悪路だったという。

それゆえ、大量の兵士が行軍していく際の食糧や弾薬の補給に多大な困難が予測されたにも拘わらず強行された、まさに「無謀な作戦」がインパール作戦だった。大松の部隊は問題の補給を担う兵站部隊であったので、作戦の開始当初より厳しい状況に直面したと思われるのだが、「おれについてこい！」には作戦前半の行軍についての言及はない。1944年3月15日にチンドウィン河を渡って北からの進撃ルートを進んだ烈兵団は、「各地で戦闘を続けながらも、概ね予定通りに前進することができた」（取材班、2018）というから、大松にとってその後の人生に影響を及ぼすような経験はまだなかったのだろう。戦史によると、烈兵団がコヒマを占領したのは4月6日とされる（戦史室、1968）。

3.2 コヒマにおける戦闘

しかし実際のところ、烈兵団の占領は「コヒマ部落の占領にとどまり、部落の南西高地（コヒマ付近を制する制高点）には陣地による有力な敵が残っていた」のであり、「この高地に増援のためディマプールから駆けつけた英印軍部隊との間で約二ヶ月にわたる死闘が繰り返されることになった」（戦史室、1968）。日本軍の侵攻に対し始めは守勢に回った英印軍も次第に攻勢へと転じていく。大松のビルマ戦線の回想はこの辺りから始まる。「わたしたちの部隊は、『烈』兵団の指揮下にあって、インパールの後方を遮断するコヒマを占領していました。しかし、いくら待ってもインパ

ールは落ちません。それどころか、コヒマは前方インパールと、後方リマプールの敵軍によって挟撃されるにいたったのです」（大松、1963）^{注5)}。

大松の回想は戦史が伝える状況に添ったもので、事実コヒマでは英印軍との間で激しい戦闘が行われている（戦史室、1968）。大松の回想にも「前後から敵弾が飛来する」といった表現が見られるものの、戦闘の最前線に立たされた歩兵や砲兵ではなく兵站を担っていたためか激烈な戦闘行動への言及はなく、「敵軍によって挟撃されるにいたった」後の回想は以下ようになる。「前後から敵弾が飛来するわたしたちの上に、雲が低くたれこめて、雨がやってきました。恐ろしいモンスーンがついにきたのです」（大松、1963）。

この回想も戦史と合致する。「ビルマは五月中旬から十月までが雨季」であり、それが「最盛期に入るのは七、八月ごろ」で、その「ころは連日猛雨が続き、河川は氾濫し、地上交通は途絶する」という（戦史室、1968）。作戦計画では4月29日の天長節（天皇誕生日）までにインパールを攻略することが目指されていたが、これは雨季に入る前に作戦を終了させる必要があったからでもある。けれども、戦闘はそれまでには終わらなかったのである。

3.3 コヒマからの退却

ビルマのこの一帯の「降水量は世界一といわれ」、戦闘が行われた当時も「月の降水量は一〇〇〇ミリを越えていた」（取材班、2018）とされる。大松は、「ずぶ濡れの中で、糧食も、弾薬もなくなりました。下がるに下がれない雨中ですが、そうしていれば、餓死のからだを白くさらしてしまうだけ、という絶対絶命の時を迎えたのです。命令も待たず、どうなるというあてもなく、部隊はコヒマをあとにして下がりはじめました」と語る（大松、1963）。

だが、この回想は状況の説明としては正しくない。コヒマで戦闘を続けていた烈兵団を率いる佐藤師団長は、再三にわたる食糧弾薬の補給要請に応えない「軍の態度に激怒して」「食なく弾丸なく、このうえ軍命令を服行することは全師団の覆滅を

意味するものと考え」（戦史室、1968）、6月1日に独断で退却を開始したからである。よって師団長から退却の命令はあったのだが、大松の部隊にはそれが届かないほど状況は混乱していたということかもしれない。何しろ、「師団長が独断撤退する事態は、日本陸軍始まって以来のこと」（取材班、2018）であり、前線にあった各部隊の混乱は想像するに余り有る。

大松の回想は続く。「ビルマに向かって、降り続ける雨の中を、アラカン山脈四十九の山ごえが待っている敗兵の行軍です。一山こすのに一日。谷まという谷まは急流となって、ゴウゴウと音を立てています。衰弱したからだは、その流れに負けてしまうのです」（大松、1963）。烈兵団の退却は、コヒマから南へ200キロにあるウクルルへ向けて始まった（戦史室、1968）。戦史が伝える、「叩きつけるような強い雨が降りそそぎ、それまで軽四輪車を通じていた道もたちまち泥田に変わった。崖は崩れ、一瞬にして滔々たる濁流になった。橋という橋はすべて押し流されてしまった」（戦史室、1968）という状況と、如上の大松の回想は一致している。「暗夜の行軍は部隊の疲労を倍加し、一夜の行程はせいぜい八軒から一〇軒」（戦史室、1968）という、まさに「一山こすのに一日」の遅々とした歩みだったのである。

3.4 「死の彷徨」

烈兵団がウクルルへ向かったのはそこで食糧の補給を受けるためだった。しかし、6月19日にやっとその北方近くまで辿り着いたところで、先遣していた部下からウクルルには既に食糧はないとの報告を受けた佐藤師団長は、さらに60キロ南東に位置する軍の補給点フミネまで引き続きの行軍を命じざるをえなくなった（戦史室、1968）。

この間、軍は独断で退却を続ける烈兵団に対し、態勢を立て直してインパールへ向かうよう再三命令を伝えている（戦史室、1968）。だが佐藤師団長は、「補給の窮迫せる現状では無理だ」とその命令を拒否し、「どこまで退却するつもりか」という参謀長からの問いに、「どこまでということはない。とにかく食えるところまで行く。フミ

ネまで行けば糧食が手に入るだろう」と答え、「軍命令を実行しないとは言わぬ。それよりまず食うことだ。軍命令の実行はそれからのことだ」と述べたという（戦史室、1968）。それほど食糧の欠乏は深刻だったのである。大松の回想からもこの窮状が伝わってくる。「食べるものはなにもありません。わたしたちが囓んでいたのは、とちゅうにはえているタケノコだけでした」（大松、1963）^{注6）}。

大松が、「やればできるのだ、という信念」を「見いだした」と述べていた「ビルマ戦線の死の彷徨」とは、このようにコヒマから退却する烈兵団が、補給の一切ない中でウクルル、フミネ、そしてチンドウィン河の渡河地点であるシッタンまで退却していく300キロ近い道程での経験と考えられる。大松の回想は以下のものである。「死は死を呼ぶといいますが、わたしは目のあたりにそれを、つぎからつぎへと見ました。ひとりが倒れて息絶えると、そのそばにヨロヨロと寄って行って、ばったり倒れるのです。そのようにして、二十人、三十人と折りかさなり、水ぶくれになって、降りしきる雨にさらされている死体のかたわらを通りすぎ、何十日かののちによくビルマにはいりました」（大松、1963）。

ここにウクルル、フミネ、シッタンといった地名は出てこないが、フミネを過ぎた先にインドとビルマの国境があり、それに平行するようにチンドウィン河が流れている。戦史によると、烈兵団の各部隊は6月下旬にフミネ周辺を通過、その後、チンドウィン河の西岸沿いを7月下旬まで南下して、8月上旬から下旬の間にシッタン周辺に集結を終えると渡河を開始し、8月31日にその「後衛はチンドウィン河西岸を完全に撤退した」（戦史室、1969）。従って大松が言う「何十日か」とは、6月初めにコヒマから退却を始めて8月終わりにチンドウィン河を渡り終わるまでの凡そ90日のことと特定される。

大松がいた烈兵団だけでなく、インパール作戦に参加した第15師団（通称「祭」兵団）と第33師団（通称「弓」兵団）も、作戦中止に伴う退却命令を7月13日に受けると、最盛期を迎えた雨

季の中、英印軍の追撃を受けながら補給なき退却を余儀なくされる。戦史はその状況を次のように伝えている。「悪疫と補給途絶に起因して指揮官以下その体力気力は極度に低下した。行軍途中多くの者が落伍し、路傍に倒れ、そして死んでいった」（戦史室、1968）。3つの師団が退却する途上、「飢えた兵士たちが行き倒れた道は白骨街道と呼ばれた」（NHK BS、2017）が、そこで目にした光景を先述のように語った後に大松は述べている。「人はなにごととも、自分の体験したことしかわかりません。あの戦争で、このわたしの体験にまさる苦しみをなめた人もあったにちがいありません。しかもなお、わたしは、日本の大軍があれ以上の悲惨な状況下におかれた例はなかっただろうと思うのです」（大松、1963）^{注7）}。

戦史によると、8月25日にはシッタンで「五十屯の米」の補給が行われ、その他の河畔拠点でも各部隊は「糧食の補給を受けた」（戦史室、1969）。「戦いに敗れ、苦難に満ちた退却戦闘の末、ようやくにして辿り着いたチンドウィン河畔で、師団の将兵は実に三ヶ月ぶりで河岸に陸揚げされた米の麻袋を見た。将兵はこの米袋を見て初めて『生き残った』という実感を味わい、蘇生の喜びを感じた」という（戦史室、1969）。大松もその1人だったはずで、大松の「死の彷徨」には、ひとまずここでピリオドが打たれたと考えられる。

大松は、「人はある時期突然に、まったく新しい自己を発見することがあるものです。苦しみもがき、ぎりぎりの瀬戸際に立ちつくしたとき、突如として訪れる光明であります。この意味において、なにごとにもあれ、それをなすには、生命をかけることが要求されるのではありますまいか」（大松、1963）と述べている。これが「白骨街道」での経験を指していることは、ここまでの検討からもはや明らかであろう。この後に続けて、「わたしは、やればできるのだ、という信念、大阪ことばでいう土性骨を、ビルマ戦線の死の彷徨の中で見いだした」と大松は言うのである。これらの戦争経験を大松はどのように「思想化」したのか、次章では先述の吉田の時期区分に沿って考えてみることにする。

V 大松の「戦争体験」の考察

1. 第1の時期（1945年—1950年前後）

敗戦後、捕虜になった大松は「イギリス兵のタバコの吸いがらを拾ってのみ、彼らの残飯を集めて命をつなぎ」、「与えられた食物は、乾パンを一日に二つくらい」（大松、1963）というような厳しい抑留生活を経て、1947年6月に漸く帰国することができた。

復員した大松は9月から日紡の大阪本社で働き、翌1948年には出征前に勤めた尼崎工場へ転勤となる。それから「一年間は戦争で失われた青春の暗い穴を埋めたい気持ちで…中略…バレーに打ち込んでいた」大松だが、1949年に「バレーはレクリエーション程度」の貝塚工場へ転勤となったため、その後は「土曜の夜行でバレーの盛んな栃木県の足利工場へ」指導に通う（大松ほか、1963）。復員者の就職難が深刻であった当時の状況からすれば帰国してすぐ日紡に復職でき、明日の食べ物にも事欠く人々が巷に溢れていたこの時期に好きなスポーツに熱中できた大松は、ある意味恵まれていたと言えるだろう。

僅か数年前の戦争経験を、この時期の大松がどのように受け止めていたかは殆ど語られていない。過酷な戦争経験と向き合うためには、もう少し歳月が必要だったのかもしれない。ビルマの戦場で大松の部下だった者たちは皆「口をそろえて」、「戦地にあったころのあなたは、いま見聞きするようなガムシャラな人ではなかった」（大松、1963）と言っている。つまり、「死の彷徨」をはじめとする戦争経験は大松を即時的に変えたのではなく、その後一定の時間が経過する中で大松を変えていったと考えられるのである。

元より、軍隊に対する反発が強かったこの時期には、戦争経験を語ること自体に難しさがあったであろうし、バレーボールの指導者としてまだ「まったく無名に等しい経歴」（大松、1963）だった大松に、それを公言する場が与えられるはずもなかった。だが、週末だけコーチをした「足利バレー部は、全日本最強のチームになり」、そのこ

とは「どれだけ自信を与えたかしれません」と述べられている（大松，1963）ので，大松の中で強いチームを作ることへの志向性がこの時期に培われていったであろうことは推察できる。

2. 第2の時期（1950年前後—1950年代後半）

2.1 「どこより強くなれ」という命令

1953年，女子バレーボール部の強化を決定した日紡は大松を監督に据え，貝塚工場に選手を集めて翌年から本格的な活動を開始する。そこで大松は社長からこう言われたという。「現在の世界情勢を見てみい。アメリカとソ連がずば抜けて国力が強いだらう。国力の強さちゅうものは，なんでも，すべて総合したもので，決して，てんでんばらばらなもんじゃない。軍備が世界一であるということは，経済も，学問も，精神も，体力も，すべて他国に対して圧倒的に強うなけりゃならん。なにひとつ負けられん。今世紀，地球上の二大勢力にのし上がった米ソ両国は，当然のことに，スポーツでも激しく首位争いをしている。スポーツで制覇することは，そのまま，世界を制覇する実力をもつちゅうことになる」（大松，1963）。

社長は続ける。「日紡はこんど，バレーボールを会社の看板スポーツとしてやる方針を立てたのだが，やるからには，絶対に強いチーム，負けないうチームにせにゃならん。その強弱によって社運が判断される。どんどん強くなっていけば，世間から，日紡の社運は隆盛とみなされ，弱ければ，衰退の一路をたどっているとみなされる。

これは世間一般の常識だ。スポーツは，その社会・団体の強弱をはかる一種のパロメーターで…中略…わが日紡バレーが強くなれば，社運も隆盛になり，日紡の隆盛はバレーを強くするじゃろう」（大松，1963）。

先行研究に上げた作田は，この「わが日紡バレーが強くなれば，社運も隆盛になり」という論理の飛躍を「呪術的な前兆論」と呼んだわけだが，この社長の言を受けた大松は，当時の心境を次のように記している。「看板にかかげたスポーツで強さを示し，それを大いに会社の宣伝に使う，だから弱いチームではもっていてもしかたがない，

どこより強くなれ—この命令は，長い過去の選手生活，足かけ六年に及ぶ戦場体験を通じてよくわかり，わたしもまた，この時，やるからには勝つチームにならなければならない，という，ただ一つにすべてをかけたのです。まず日本一に，そして世界の王座に—」（大松，1963）。「どこより強くなれ」という命令が，なぜ大松には「戦場体験を通じてよくわか」ったのだろうか。

2.2 勝てば官軍，負ければ賊

大松は，自分が指導するバレーボールを明確にアマチュアスポーツと位置づける。その上で，「いかに小さな試合にせよ，勝つことが第一です。まして，オリンピックや国際選手権大会では，優勝なくしては，いかなる栄誉ありません」と言い切っている（大松，1963）。

大松がこう考えるのは，「プロの世界には，名誉よりも収入の問題があり，したがって手かげんもあるかもしれ」ないが，「アマに与えられるものは，名誉と栄光と誇りであり，そして，それだけ」なのだから，「これは優勝以外には得られ」ず，従って「アマチュア＝スポーツは勝つことだけにすべてがある」のであって，「二位とか三位とかいう成績は，アマチュア＝スポーツではなにも報いられたことにな」らないからだという（大松，1963）。「優勝以外」では名誉も栄光も誇りも与えられないとする考え方は，当時にあってもかなり特徴的な主張と言えるが，実はこの発想の原点に大松の戦争経験が在ることを確認できる。

大松は，日紡貝塚の監督になった当初から自分を支えた言葉は「勝てば官軍，負ければ賊」であったとし，この「勝てば官軍」を日本軍の敗戦によって体験した」と述べている（大松，1963）。そして大松の中では，オリンピックや世界選手権における試合は次のように戦争と置き換えられる。「試合は真剣勝負であり，戦争と同じで，現在のスポーツは，殺すか殺されるかだ。殺すということばは，穏当を欠くけれども，二位ではなんの価値もない。あくまでも完勝の一位でなければ無意味なのだ」（大松，1963）。このようにスポーツの試合を戦争と同一視することによって，「優

勝以外」には「なんの価値もない」という大松の考えは初めて理解可能となる。戦争には勝つか負けるかしがなく、2位や3位はないからである。

戦争の劈頭に召集された大松は、開戦当初の勝ち戦も経験している。「おれについてこい！」の中には、緒戦の勝利で占領したマニラやシンガポールの町で「ずいぶん楽しく遊んだ」という記述もある（大松、1963）。そういった経験の後、インパールの負け戦で生死の境をさ迷い、捕虜収容所で抑留生活を強いられ、帰国してからは人々の冷たい視線も受けたであろう大松が、それらの経験を「勝てば官軍」という信念に「思想化」したわけである。そのような信念を持った大松には、「やるからには勝つチーム」を目指すこと、即ち「どこより強くなれ」という社長の命令は「よくわか」るものだったのである。

2.3 「勝てば官軍」の実践

大松は、この「勝てば官軍」という「考えや行動」には、勝ちさえすれば、どんな非道なことも許される、とする一面があり、「もし太平洋戦争に勝ってさえいたら、日本軍の行為も残虐としてあばかれ、罰せられることもないばかりでなく、あるいは、勇敢な物語となったかもしれません。歴史は多くのばあい、時の勝者のがわに立って記録されるものですから」と述べた上で、自分が言う「勝てば官軍」とは、「これが正しい、この正しさは、強くなり、勝つことによって証明され、納得してもらえるのだ、という考えから」のものと言う（大松、1963）。そしてこの考えを大松は、実際の指導として実践して見せたのである。

最初は「ただからだが大きくて、高校時代にバレーをやったことがあるというだけの、名もない」選手ばかりだった日紡貝塚の指導を始めて半年、なかなか効果があがらなかった大松は「きびしくやっているようでも、やはり相手が女性であることを意識しすぎているのだと気づき」、「女だから、とかげんしてやっていたのでは、とても、たいしたものにはなれない。男がやるような練習をやって、はじめて他の女性チームを圧するようになる」と「気づいたときから、練習するとき」「選

手たちを女性とかなんとか考えないことにし」たと言う（大松、1963）。大松が他の指導者たちと異なるやり方を始めたのはここからだと言える。

その激しい練習を見た多くの女性社員は「その異常さに息をのんで」、「かかる非道は許せない」「女性の敵だ」と会社に訴えたが、「勝てば官軍」を日本軍の敗戦によって体験し、「強くなって勝つこと以外に、わたしのやり方が正当なことを主張する方法のないことを知って」大松は、屈することなくさらに「毎日毎日の練習に激しさを加え」ていった（大松、1963）。「勝てば官軍」という信念に思想化された大松の戦争体験は、彼の指導をその根底で強力に支えたのである。「やがて、一年たち、二年たち」試合で勝つようになると、大松の指導を見る周囲の目が変わってきて、「あのようにやらなければ強くはなれないのだ」「日本一になるには、あの猛練習は当然なのだ」「それなしには世界一にはなれないのだ」ということが、勝つという「事実を通して」「理解されてきた」（大松、1963）のであった。

2.4 「戦中派」としての大松

戦争経験に着目する時、この第2の時期に「戦中派」という集団が明確化されたことは押さえておく必要があるだろう。この集団は、『大正生まれ』（1912—1925 年生まれ）ということになり、この中心には、アジア・太平洋戦争で最も戦死率が高かったと推定される 1920 年生まれから 1922 年生まれの年代が位置づいている（吉田、2011）。

そして、直接戦闘行為に参加したという責任感と割りの合わない世代としての被害者意識を合せ持ちながら戦後を生きた「戦中派」の人々は、この第2の時期に「軍隊を全面的に肯定する議論」にも、また逆に全面的に否定する議論にも反発しつつ、軍隊生活にある種のノスタルジアを感じる人々」としても把握されている（吉田、2011）。吉田は、「軍隊生活で鍛えられたことによって、克己心や忍耐力を身につけることができた」と語る元兵士は多い」と指摘しているが、この後の時期に「軍隊は悪い人間も作ったが、強い人間も作ったといまでも私は思っている」（大松ほか、1963）

と語る大松は、そのような「戦中派」の1人に明らかに位置づけることができるだろう。因みに大松の生年は1921（大正10）年で、まさにアジア・太平洋戦争で最も戦死率が高かった「戦中派」の中心となる年代なのである。

しかしながらそのような「戦中派」の人々の多くは、それまで禁じられていた旧軍人団体の結成や自衛隊という形での再軍備に参画するなどの行動を起こしていく一方、戦争に中心的に関わったことに対する戦前派や戦後派世代からの批判へ反発しながらも、この時期には戦争についてまだ積極的に語ることはなかったのである。1962年の世界選手権で優勝した翌年に出版された「おれについてこい!」をはじめとする著作や講演等の中で、大松が自身の戦争体験を盛んに語るのもこの後のことになる。

3. 第3の時期(1950年代後半—1960年代後半)

3.1 反復練習の根拠

大松は「自分の戦争体験をくり返し話し」、その「困苦と欠乏そのものの第一線での、命がけの体験だけが、いまは楽しい思い出となってつぎつぎとよみがえる」という実感を選手たちに伝え、「そうした深い思い出にひたる幸福」を今作っているのだと、練習に明け暮れる選手たちに現在の生活を価値づけさせようとしている（大松、1963）。この点で大松は、「軍隊生活にある種のノスタルジアを感じる人々」の1人であったことは間違いない。

しかし大松は郷愁の世界に止まることなく、軍隊を「とくにスポーツのトレーニングには役立つことが多かった」（大松ほか、1963）と評価し、軍隊経験を次のようにスポーツと結びつける。「軍隊にはிரいたてには、演習課目の一つに敬礼練習がありました。上官に対して、帽子の横に右手をあげて敬礼する動作です。たったそれだけのことをするのに、何百回、何千回とくり返させられるのです」（大松、1963）。そして「日本一のチーム作りを考えたとき“これだ”と思った」大松は、「バレーのプレーだって、頭のシンにこびりつくまで、何千回でも何万回でも同じことをあかせず

につづけさせようと考えた」のである（大松ほか、1963）。

大松は言う。「名人芸といわれるものも、一つのことのくり返しからできあがる」のであり、バレーボールでは「ボールを拾う幅が一日一ミリ伸びれば、その積みかさねは、やがて一〇センチにも二〇センチにもなります」（大松、1963）。このような「くり返し」「積みかさね」によって、有名な「回転レシーブ」が習得されたわけだが、それが生み出された経緯を大松は、「いきなりやらせても無理だった」ので、「あきずに何べんでも根気よくくりかえす単調方式」「軍隊方式を採用した」と述べている（大松ほか、1963）。

この軍隊の訓練からヒントを得た反復練習には、「同時に二つの長所があった」と大松は言う（大松ほか、1963）。一つは「しつこく練習された技術は完全にマスターしてなかなか忘れないということ」であり、「もう一つは、単調に明けても暮れても同じことをくり返えさせるということは、強い忍耐力を養うのに最適だった」ことである。つまり繰り返される練習は、「プレーの上達とともに、強固な精神力を生んできた」と大松は考えているのである。

3.2 率先垂範

こういった大松の指導に見られる大きな特徴は、毎日深夜まで、時には翌朝まで続くような長時間の練習をコーチなど置かず大松1人で行ったことである。よってそれは、「わたしが選手を相手にボールを打ち」「十人の選手が代わるがわる百ずつ打てば、わたしは千回打つ」ことになり、「同じ体力でも、わたしのほうがはるかに苦しい」というものになる。「だからわたしはいえます」と大松は言う。「おれですら、これだけやれるではないか。おまえたちの若さでやれなくてどうする。おれについてこい」（大松、1963）と。

大松は、「指導の立場にあるもの」は「みずから先頭に立ってやらなければ、成功はしない」とし、この姿勢を「率先垂範」という言葉で表現している（大松、1963）。そして、「人を死地におもむかせるには、みずからもまたそこにおもむくだ

けの用意と覚悟がなければなりません」と言うそこでの説明から察せられるように、「率先垂範」も大松が自らの戦争経験を信念へ「思想化」した戦争体験と言える。

大松によれば、予備士官学校を卒業した25歳の大松が小隊長として配属された部隊の兵隊たちは、「最低三十二歳、最高四十五歳」の「老兵」で、「あんな若造のことをだれがきけるか」と「聞こえよがしにいった」という（大松、1963）。そこで大松は、「みずから先頭に立ち、なにごととも兵より先に手を出してやり」「兵といっしょになって荷物をかつぎ」「口でいう前にまず働いた」ことで、「海千山千の老兵たちも、ほどなく若造のわたしに心服するようになる」（大松、1963）。大松はこの軍隊での経験を、「人を自分についてこさせる術を、わたしは戦地の実践によって会得した」と意味づけているのである（大松、1963）。

3.3 精神力の重視

1958年には国内の全タイトルを制覇して日本代表となった日紡は、6人制バレーボールが主流の世界に打って出る。大松は、9人制とは異なる6人制の経験不足と体格の劣勢を克服して外国チームに勝つため、「どのような困難にもめげない精神力をもち、体力の限界をこえるハード＝トレーニングで鍛え、彼らにまさる技術を身につけるならば、かならず勝て」と信じ、「年ごとに激しさを増すハード＝トレーニングを続け」ていった（大松、1963）。

ここで上げられている精神力、体力、技術が大松の考える「ハード＝トレーニング」を構成する要素と言えるが、この3つは大松の中で密接に結びついていた。大松は目指す精神力をしばしば「根性」という言葉で表現し、「根性はからだを鍛えることから生まれる」と考える（大松、1963）。そして「あらゆる勝負は体力がものをいい」、「体力がなければ気力は出」ず、「体力に気力が充実して、はじめて敵を制することができ」と語る大松の指導は、精神力と体力に偏したいわゆる「根性練習」だったと語られることが少なくない。

だが、大松は決して技術を軽視していたわけではなく、むしろ技術革新に熱心に取り組んでいた。「諸外国が六十年積みかさねた」6人制の「伝統と技術に打ち勝つためには、どこの国にもない技を考案し、身につけねばならなかった」（大松、1963）からである。こうして「回転レシーブ」だけでなく、「各国の選手をノイローゼにしたほど威力を発揮した」サーブ（大松、1963）など、「どこの国にもない技」「彼らにまさる技術」が生み出されていく。大松が目指したのは、これらの技術の習得に向かって行われる長時間の反復練習を通して、精神力、体力、技術を同時に身につけることだったのである。

しかしながらその一方で大松は、勝敗を決する最終的なカギは精神力にあると考えていたことも確かである。技術は「たゆまぬ練習の積み重ねで向上できるとしても、一番重要なのが精神面である」と述べているからである（大松ほか、1963）。実際、1962年の世界選手権で優勝した時に大松は、「力においてまさるソ連を破ったのは、選手たちの闘志であり、精神力だった」と述べているし、ソ連と日本の「彼我の実力六対四は、ふだんに鍛えた精神力によって、四対六と逆転した」と考えている（大松、1963）。

このソ連との決戦を振り返った大松は、第1セットをとられ第2セットを取り返した後の「死闘」を、「技術はほとんど伯仲」し「これを決するものはただ、精神力」だったと回想する（大松、1963）。このように、人が決死の覚悟を求められる試練に直面した時、それに打ち勝つために一番必要なものは精神力であるとする考え方こそ、大松の戦争経験の中で最も重たい意味を持った「ビルマ戦線の死の彷徨」から導かれたもののなのである。

3.4 「死の彷徨」の思想化

大松は、「人間は、肉体ばかりでなく、精神も後天的に強化することができ」と考えている（大松、1963）。この前提が、日々の厳しい練習によって精神力を強化しようとする指導へ彼を向かわせたわけだが、既に確認したようにそれは、技

術の習得と結びつけられた反復練習により、「技術だけでなく、精神力もできて」くる（大松、1963）という考えだった。

ただし大松は、技術の習得とは離れた視点からも精神力の強化を考えていた。大松は「選手が多少の熱を出したりケガをしたくらいでは」練習を「休ませたりしない」し「生理だからといって」休むことも許さないが、それは「強い精神力を作らないことには、練習だけで脱落していつから」だという（大松ほか、1963）。そこで大松が言う「強い精神力」とは、「眠くなって“眠いな、もうやめよう…”と考える」或いは「“苦しい、もうこれ以上は耐えられない…”と思う」「自分自身にうち勝つこと」と説明される。それゆえ大松は、選手たちが「試合に勝つ前に自分自身にうち勝てるようつとめ」、「自分に勝てなければ、世界選手権に勝てるプレーヤーにはなれないぞ!」と叱咤する。そして「この精神面のトレーニングをどうするか」に悩んだ大松が達した「一つの結論」は、自身が「選手よりもよけいに苦しい練習をする」こと、つまり先に取り上げた「率先垂範」だったのである。

それをできた大松は、「私が自分に勝つようになったのは、兵隊にいつてなぐられたりけられたりの教育を受け、将校になってからも年上の部下を引きいて自分が率先して苦勞をしようと思ったり、戦地で生死の境をさまよっているうちに、しだいに成長してきて、いまの苦しい練習に平気で耐えられる私を作ったのではないか」（大松ほか、1963）と述べ、「自分に勝つようになった」画期を軍隊生活の全体に見出している。だがその中でも、大松が言う「もうやめよう」と考え「もうこれ以上は耐えられない」と思ってしまう「自分に勝つ」ことを極限まで要求されたのは、間違いなく「ビルマ戦線の死の彷徨」だったはずである。

既に「死の彷徨」の状況は明らかにしたが、大松はそれを次のようにも語っている。「自動車の耐久力テストと違って、人間の耐久力競争は、精神力の衰えたものから敗退していく。すぐ前をヒョロヒョロ歩いていく兵隊が何かにつまずいて倒れると、もうそのまま死んでいった。毎日毎日十

人二十人と死んでいった」（大松ほか、1963）。そして「こうなると、死人を見ても何とも思わなくなってしまう。また死んでいる、あまた死んでいるワシもいつかはこうなるんやろな…といった気持」になった大松だが、それでも倒れそうになる「自分」に負けずに「どうにか持ちこたえたのは、スポーツで身体をきたえていたのと、精神力のおかげ」だと言う（大松ほか、1963）。「自分に勝つ」ことができず、「白骨街道」に倒れていった戦友たちの姿を深く脳裏に刻みながら、「いかなる肉体的困難も精神力によって克服できる」こと「やればできる」（大松、1963）ことを、大松は命懸けで経験したのである。

このような試練を乗り越えた大松は、持病を持つ選手が「もうこれ以上バレーを続けると、だめになってしまいそうです」と訴えた時に、「だめになると思ったらだめになる。負けちゃだめだ」（大松、1963）と励ますことができる。「人生には病氣をするぜいたくも許されないことがあり、時期があり」「死に至るまで、かぜで休むことすらできない人もある」（大松、1963）修羅場を大松は経験したからである。また、選手たちが厳しい練習にへこたれそうになると、「これくらいの練習がなんだ。まだ生きて息をしているじゃないか」と叱る。しかし、「実際は、選手よりわたしのほうが倒れそうになっている」ので、大松は「選手たちに向かって叫びながら、実は自分自身にどなりつけていた」とも言っている（大松、1963）。そのような時に大松は、「苦しいことがあっても、インパール作戦のときを思い出せば何でもないじゃないか」と、「自分にも言いきかせてい」たのである（大松ほか、1963）。

そして「率先垂範」の大松が打つボールに向かい、「絶対に拾う」ために、たえずなま傷をつくり、背中や腰をくじき、また、その技の後退を許さないために、病氣も病氣とせずに練習しつづけた選手たちは「やればできるという自信」（大松、1963）を獲得した。こうして大松の「ビルマ戦線の死の彷徨」の経験は、「東洋の魔女」に対する日々の指導の中に「やればできる」即ち「なせばなる」という信念に思想化され、魔女たちに伝えられた

のである。

VI 結 語

高度経済成長を担う「社会の中堅層となった」戦中派の人々が「敗戦から受けた精神的打撃から立ち直り、自己の世代に対する自信と自負を獲得していった」（吉田，2011）1950年代後半から60年代後半は、大松がバレーボールの指導者として成功を収めた時期と完全に重なっている。世界一になった大松はその成功を、自らの戦争経験を思想化した「勝てば官軍」「率先垂範」、そして何より「やればできる」「なせばなる」という信念に支えられたものであったと語ったが、このような発想は、スポーツ関係者だけでなく一般の人々にとっても、「ひとつの人生における教訓として」（NHK，1965）支持されたのであった。

ここで注意したいのは、この時期に大松が示した軍隊や戦争に対する前向きな捉え方は、彼1人に特有なものではなかったということである。大松の後ろには多くの「戦中派」の人々がいて、この時期、彼らは各自の戦争経験と前向きに向き合うようになり、それぞれが身を置く世界においてその経験を思想化しつつあったのである。つまり、大松は決して特殊な存在だったわけではなく、彼はスポーツの世界でそれを表明したという意味で、言わば「戦中派」の代弁者だったと言える。大松の主張がスポーツの世界を越え、「人生における教訓として」この時期に社会の中で広く共有された理由の1つはここに求められよう。

ただし大松の戦争経験、特に「ビルマ戦線の死の彷徨」の経験は、補給を軽視した作戦計画により「多数の餓死者を出した」（吉田，2017）他の多くの戦場と状況は共通する一方で、それらにおける戦争経験とは明確に異なる面があったことも指摘できる。大松が経験した「死の彷徨」は、軍命令に反して師団長の独断で行われた「全師団の覆滅」を避けるための退却だった。その点において、「十死零生」（森本，1992）の特攻攻撃は勿論のこと、同じ陸軍でもサイパン島や硫黄島をはじめ、太平洋の島々で繰り返された総員玉碎の「死」

へ向かうしかなかった「敵兵」との戦いとは明らかに異なり、強い精神力を持つことによって僅かながらではあっても生きる可能性が残された、「生」へと向かう「自分」との戦いだった。

スポーツは「勝つことだけにすべてがある」と考える大松は、「この精神は、単にスポーツばかりでなく、人生の全般に通じるもの」と言う（大松，1963）。なぜなら、大松にとって「生きるとは勝ち抜くことだから」（大松，1963）である。「生きる」ことへ向かって自分と戦い、「勝ち抜くこと」ができた「死の彷徨」の経験は、特攻や玉碎とは違って、戦後の社会を生きる大松にとって、この時期の自分を支える肯定的な戦争体験へ思想化できるものだったのである。

このような大松は、1950年代後半から60年代後半の時期に自らの戦争経験と向き合い、そこに何らかの意味づけを行い、それについて発言を始めた多くの「戦中派」の1人であると言えるのだが、未だ「語らない部分」（吉田，2011）があったという点においてもこの時期の「戦中派」の姿を体現している。戦友会の会誌においてさえ、「一九七〇年代に入ると、軍隊に対する手厳しい批判の論評が公然と掲載されるようになり、さらには戦争経験者の多くが鬼籍に入り、「軍隊の加害証言などを抑制」するような機能もあった戦友会の解散も進む1990年代以降には、それまで「遺族への配慮を最大の理由にして」語ることを避けてきた「凄惨で醜悪な戦場の現実」を元兵士たちが語り始める（吉田，2011）。

インパール作戦の生き残りによる証言の中にも、大松が語ることを避けたと思われる事実を見ることができる。例えば、「白骨街道」に倒れた兵士たちはまだ息がある内にハゲタカに食われ、手榴弾による集団自決もあり…といった悲惨な現実の数々である（門田，2011）。大松と同じ烈兵団の元兵士は語る。「一人で行動をとるなって、命令が出た。一人でいるなど、二人以上で、一人だと殺されて肉食われちゃうから。そうやって命令が出ただよ。殺してね。肉を取ってさ、それをまた、ものと交換して、同じ日本軍同士で、そのぐらい落ちぶれただ」（取材班，2018）。しかし、

これらの地獄絵図は大松の回想には出てこない。

大松は1978年に57歳で早世する。もし大松がそれ以降も健在であったならば、彼が語る戦争体験にも1960年代のそれから変化が見られた可能性がある。戦争の「体験は経験より出発し帰結を求めて思索しつづけ変容する」からである。実際、以前は「戦後の青年たちは徴兵検査もなく兵隊へもいかないで、集団的に練成される機関がないのを私は残念に思っている」（大松ほか、1963）とまで言っていた大松だが、1970年代に入ると、軍隊における「教育は名ばかりで、新兵をいじめぬくというものであった」と厳しく批判している（文藝春秋編集部、1971）し、敗戦後の捕虜収容所での生活について、かつては「ひどいめにあわした相手を憎悪し続け」ることは「わたしにはできない」（大松、1964）と語っていた大松も、1970年代半ばに行われた捕虜生活経験者による座談会では、英軍兵士による虐待や差別についてかなり感情的に告発しているのである（大松ほか、1976）^{注8）}。

本論文の目的は、大松の戦争体験と「東洋の魔女」の指導に具現化された考え方との関係を、先行研究に見られるような戦争体験の表面的把握を越えて明らかにすることであった。この目的を達成するために、戦争体験を固定的で不変的な過去の出来事と見るのではなく、それは体験者のその後の人生の中で変容していくという視点を以て、戦後の社会を生きる大松が「東洋の魔女」を指導した時期における戦争体験としての意味を把握し、その戦争体験は彼のスポーツの指導をめぐる考え方とどのようにつながっていたのか、そして実際の指導においてどのような姿として具現化されたのかを明らかにしようとした。

検討の結果、大松は自身の戦争における経験を「勝てば官軍」「率先垂範」という信念に思想化し、勝利することに絶対的な価値を置いた長時間に及ぶ激しい練習を自ら先頭に立って行い、また、大松の戦争経験の中で最も重たい意味を持ったビルマ戦線における「死の彷徨」を思想化した「やればできる」「なせばなる」という信念は、技術や体力にまして精神力を鍛えることを重視した彼の

厳しい指導の在り方を導く核となった戦争体験であることが明らかになった。そして、かかる戦争体験の持ち様は、大松が成功した時期における多くの「戦中派」のそれと共通する面があることも理解された。

戦後の社会に影響を与えた思想を分析する大部の著作をものした小熊は、日本の「戦後思想とは、戦争体験の思想化であったといっても過言ではない。戦後思想を語ることは『日本人』にとって戦争の記憶とは何であったか』を語ることと、ほとんど同義である」と述べ、戦後の論壇をリードした思想家たちの戦争経験の持ち方の相違が、各々の思想にどのように反映されているかを細かく論じている（小熊、2002）。このような仕事は、戦後のスポーツ界を牽引した指導者たちについては殆ど行われてこなかったということを、本論文を結ぶに当たって改めて自覚させられるのである。

謝辞

本論文を執筆するに当たり、「東洋の魔女」の谷田（井戸川）絹子氏と松村（神田）好子氏のお2人に、大松監督の様々な面について詳しくお話を聞かせていただいた。深く感謝申し上げますとともに、昨年末に逝去された谷田氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。合せて、筆者がこのお2人に話をうかがう機会をつくって下さった古我和俊氏と甲斐麻見子氏にも、この場を借りて御礼申し上げます。有り難うございました。

また、1964年東京オリンピック以後の大松と東洋の魔女に関する資料の収集では、東京学芸大学大学院修士課程の諏訪桜子さんに手伝っていただいた。記して感謝します。

付記

本論文は、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科平成27年度広域科学教科教育学研究に採択された「運動部に暴力的行為が継承される社会的要因に関する研究」において得た着想を発展させ、新たに執筆したものである。また本論文の一部は、2016年度NHK番組アーカイブス学術利用

トライアルの助成を受けて行った『東洋の魔女』を指導した大松博文のスポーツ指導観の社会的共有に関する研究」の成果でもある。

注

注1) 吉田は、佐藤の「経験」と「体験」の区別を「説得的である」として引いている（吉田，2020）が、佐藤が「私も七十を超え、『太平洋戦争とは私にとって何であったか』、これから大きく考えの変わることも無さそうである」（佐藤，1990）として、言わば個人の中で戦争体験を完結させたのに対し、吉田の考察は「元兵士たちが自分自身の体験に戦後どのように向き合ってきたのか」を「社会全体の変化とも関連させながら明らかにしたいという問題意識」に支えられているため、戦争体験は社会変化と関わりながら各人の生涯が終わるまで変容していくものとして捉えている点でより広がりがある。そしてこういった視角から、戦争中に経験したことと、その後、それらがどのような意味を持つものになっていくのかを分けて考える取り組みは、吉田だけでなく、福岡（2009）、成田（2010）をはじめ一定の研究の蓄積がある。成田はこの一連の研究を、「兵士たちの『経験』の内部に入り込むこと、またその『経験』を書き留めた作品をその時々^{ミヅ}の状況のなかで読み説き、いまの時点での評価を与えることが実践されている」と整理している（成田，2015）。そこでは、吉田が行ったような「経験」と「体験」を厳密に区別する作業が必ずしも為されているわけではないが、実際に経験したことと戦後に見出されていくそれらの意味との関係が様々な視点から論じられている。本論文は、かかる視角から戦争経験を有する我が国のスポーツ指導者に対して分析を試みた嚆矢と言えるだろう。

注2) 大松をはじめ、筆者以外による記述の直接引用は除く。

注3) 吉田の時期区分に照らせば2つの時期に跨るものの、1953年末から始まった大松の日本一を目指した戦いとその後の世界一を目指した戦いは連続していたと考えられる。1958年に国内の全タイトルを制した大松は、「今や国内では、とるべきタイトルが何もないと考えたとき、私の目は海外へむかっていた」（大松ほか，1963）と述べているからである。そして、1962年の世界選手権に優勝した直後に大松が引退を表明したという事実から、この世界選手権優勝が大松にとっては最終目標地点であったと考えられ、その翌年に出版された著書に述べられたことは、この連続した約9年間に形成された大松の考え方の言わば完成形と理解できる。本論文が戦争体験に着目して明らかに

したのは、まさにこの9年間につくられ、世界選手権の優勝によって完成した大松のスポーツの指導をめぐる考え方である。そういった意味で、多くの国民の金メダル獲得の期待に応えるべく引退を撤回し、東京オリンピックまで戦いを延長したこの後の2年間は、世界選手権優勝までの9年間と連続しているとは言い難い面がある。

注4) 本論文で使用した「戦史叢書」は、「大本営の幕僚の立ち位置から各戦線を俯瞰するような視角から分析がなされている」といった批判はあるが、「戦争の時代を研究する者にとって」「未だに必読文献」（吉田，2011）とされる、全102巻に及ぶ公刊戦史である。

注5) 「リマプール」は「ディマプール（Dimapur）」の誤植と思われる。

注6) ここに至る状況を大松は別書でこう述べている。「マッチもなくなってしまって火も使えない。死んでゆく牛や馬の皮をはいで、臓物をとり取り、われわれはあらそって生の肉をかじった。ヒョロヒョロにやせた兵隊たちが血のしたたる生肉にかぶりつく姿はこの世のものとも思えない。そのうちに牛や馬はみんなたべてしまい、われわれはジャングルの中からタケノコを掘り出して、皮をむいて生のままかじりついていった」（大松ほか，1963）。

注7) 文脈からすると、「しかもなお、」は「しかしなお、」の誤植ではないだろうか。

注8) 大松は、1976年に行われたこの座談会において英軍の所業について様々語っているが、そこには、1962年に出版され、ビルマの捕虜収容所における英軍兵士の振る舞いを西欧ヒューマニズム批判の視点から論じた「アーロン収容所」（会田，1962）の影響が明らかに見て取れる。「有名なアーロン・キャンプ」という発言や、英軍の女性将校が日本軍兵士の前では裸で平気だったことを、会田が指摘した「日本人を人間扱いしていなかった」という視点から説明する発言が見られるからである。「経験より出発し」「変容する」「体験」の理解においては、このように経験の後に得た知識が及ぼす影響にも注意が必要である。

文 献

- 会田雄次（1962）アーロン収容所 西欧ヒューマニズムの限界。中央公論新社。
- 新雅史（2013）東洋の魔女論。イースト・プレス。
- 蘭信三（2009）オーラル・ヒストリー実践と歴史との〈和解〉。日本オーラル・ヒストリー研究，5：25-26。
- 防衛庁防衛研修所戦史室（1968）戦史叢書インパール作戦—ビルマの防衛。朝雲新聞社。
- 防衛庁防衛研修所戦史室（1969）戦史叢書イラワジ会戦—ビルマ防衛の破綻。朝雲新聞社。
- 文藝春秋編集部（1971）アンケート私のなかの日本陸軍。

- 文藝春秋, 49(5): 57.
- 大松博文 (1963) おれについてこい! わたしの勝負根性. 講談社.
- 大松博文 (1964) なせば成る! 続・おれについてこい. 講談社.
- 大松博文・大松美智代・河西昌枝・宮本恵美子・谷田絹子・半田百合子・松村好子・増尾光枝 (1963) “東洋の魔女”の五年間一日紡貝塚バレーチームの涙と誇りのものがたり一. 自由国民社.
- 大松博文・水原茂・佐藤忠良・山本七平 (1976) 座談会 シベリアの日本兵捕虜—歴史証言「収容所群島シベリア」「米軍キャンプ」に囚われて. 週刊読売, 35(37): 42-47.
- 海老原修 (2000) 高度経済成長を支えた呪術—大松博文とその論理一. 体育の科学, 50: 913-917.
- 遠藤美幸 (2015) インパール作戦. 吉田裕・森武磨・伊香俊哉・高岡裕之編, アジア・太平洋戦争辞典. 吉川弘文館, p.51.
- 藤原彰 (1978) 天皇制と軍隊. 青木書店.
- 福岡良明 (2009) 「戦争体験」の戦後史. 中央公論新社.
- 石坂友司・松林秀樹 (2018) あとがき. 石坂友司・松林秀樹編, 一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか. 青弓社, p.249.
- 門田隆将 (2011) 太平洋戦争最後の証言 第二部陸軍玉砕編. 小学館.
- 牧野共明 (1986) スポーツにおける根性主義. 伊藤高弘・草深直臣・金井淳二編, スポーツの自由と現代 上巻. 青木書店, pp.55-68.
- 三隅二不二 (1966) 新しいリーダーシップ 集団指導の行動科学一. ダイアモンド社.
- 森川貞夫 (1980) スポーツ社会学. 青木書店.
- 森本忠夫 (1992) 特攻 外道の統率と人間の条件. 文藝春秋.
- 成田龍一 (2010) 「戦争経験」の戦後史—語られた体験／証言／記憶. 岩波書店.
- 成田龍一 (2015) 現代社会の中の戦争像と戦後像. 成田龍一・吉田裕編, 記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争 岩波講座アジア・太平洋戦争 戦後編. 岩波書店, pp.3-36.
- 成田龍一 (2020) 増補「戦争経験」の戦後史—語られた体験／証言／記憶. 岩波書店.
- NHK (1965) 現代のスポーツ「ある監督」～大松博文の場合. 1965年9月12日放映.
- NHK BS (2017) 戦慄の記録 インパール完全版. 2017年12月10日放映.
- NHK スペシャル取材班 (2018) 戦慄の記録 インパール. 岩波書店.
- 小笠原博毅・山本敦久 (2019) やっぱいいらない東京オリンピック. 岩波書店.
- 小熊英二 (2002) 〈民主〉と〈愛国〉戦後日本のナショナリズムと公共性. 新曜社.
- 作田啓一 (1967) 恥の文化再考. 筑摩書房.
- 佐藤衛 (1990) 雲騰る海—海軍軍医太平洋戦争流離譚. 佐藤衛.
- 下竹亮志 (2018) 根性論の系譜学—六四年東京オリンピックはスポーツ根性論を生んだのか? 石坂友司・松林秀樹編, 一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか. 青弓社, pp.85-98.
- 杉山圭子 (2019) 東洋の魔女①～⑩. 朝日新聞 3月12日—3月23日付朝刊.
- 谷口雅子 (2007) スポーツする身体とジェンダー. 青弓社.
- 山岸俊男 (1979) 根性主義—『おれについてこい!』の内容分析. 一橋論叢, 81: 181-197.
- 吉田裕 (2011) 兵士たちの戦後史. 岩波書店.
- 吉田裕 (2017) 日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実. 中央公論新社.
- 吉田裕 (2020) 兵士たちの戦後史—戦後日本社会を支えた人々. 岩波書店.

(2020年10月6日受付)
(2021年4月2日受理)